例えば、任妊という二文字はもともとには同字異形であったが、“イ”と“女”とが両方とも人体の形符であるから、任意に作られる。故に任妊は両方とも妊娠と訓じられ、女が妊娠することを意味する。『大戴礼・保傅』では、“周后妃任成王於身、”と記し、『素問・上古天真論』では、“女子二七而天癸至、而任脈通”と記し、『漢書・叙傳』では、“劉媼任高祖而夢與神遇”と記し、『元后傳』では、“初李親任政君在身”と記し、顔師古が“任、懐任。”と注して、それらは、古く任と妊とは同字同義であったことを十分に証明している。女が妊娠することは身体の負担が重くなることであるから、重任、負任、責任などの一連の詞義が引き出されている。そしてまた、詞義によって二文字に分化する。漢字の発展過程では、類似的な分化が非常に普遍的であった。分化されなかった重複字形が、異体字として保存されたのである。重複字形の全部が使われたわけではないが、文字資料として全部を保存しなければならなかった。問題は、字書に混入した偽字をいかに処理するかである。偽字の出所は三つであった。一つめは、魏晋時期の碑刻と墓誌であり、二つめは、唐宋時期に写した佛経であり、三つめは元明時期の小説や唱本である。一般にそれらの資料を写し取る人は、文字の教養が高くないので、誤字を写すことが免れ難いのである。その後も誤りを因循踏襲して、一旦、字書に混入してしまうと、合法になり、それを根絶しないと、偽字が益々多くなる。

現在、規範に従わないで漢字を書く人がまた多く、どの都市ても、どの町ても、いくつかの商店の扁額や公告に規範に合わない誤字が現れ、もし一つ一つずつ字書に収録すれば、字数を膨張させるばかりではなく、もっと有害なのは、学習者が是非を弁ぜず、真偽を混ぜ述べ、何に従ったら良いのか分からなくなる恐れがある。

我々は、字書を新編する時に厳選して、偽字を正字から除いて、規範に合わないかつ出所がある誤字は別の専門書に保存して研究の参考にすべきであると考えている。実際、このような仕事をした人があり、前述した遼代僧侶行均の『龍龕 手鑑』、清朝の趙叙の『六朝別字記』、羅振玉の『碑別字』などはこのような著作に属している。このことは、字書に文字を収録する時の混乱を防ぎ、文字研究者に便利も提供でき、後世にもいいことである。

注訳：

(1) 王鳳陽『漢字学』ｐ545、吉林文史出版社、1989

(2) 陳明遠「数理統計在漢語研究中の応用」、『中国語文』1981年第1期

(3) 陳重 「試評漢字簡化的一些論説」、『文字改革』1985年第4期

(4) 高 明『中国古文字学通論』上編 ｐ146～180、文物出版社1987

契丹大字に対する六十年間の研究の総述

劉 鳳翥

契丹族は遼国を建ててから相次ぎ、二種類の形の違う文字を創製した。それは、契丹大字と契丹小字であり、契丹語を記録するために用いられていたのである。現在に伝来した契丹文字にもこの両者が併存している。一つは、遼寧省錦西縣西狐山から出土した簫孝忠墓誌を代表とするものであり、もう一つは、内蒙古巴林右旗索博日嘎蘇木瓦林茫哈遼慶陵から出土した帝、后哀冊を体表とするものである。前者が契丹大字であり、後者が契丹小字である。この説は海内外の学界に認知されている。本論は、この説により、海内外の数多くの学者達の契丹大字についての研究状況を述べると同時にこの分野での研究の経過を展望して見たい。不適切なところがあれば、海内外の諸先生のご指導を承りたい。

現在に伝来した契丹大字の資料は皆、本世紀に相次ぎ出土、発見されたのである。最初に発見されたのは遼の時代咸雍八年（1072）の＜大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑＞に刻したものであった。碑には漢字が陽刻で契丹大字が陰刻である。その漢字碑文は、乾隆四十六年（1781）刻印した《欽定熱河誌》に著録したものであるが契丹大字碑文は、1935年に刊行されたのである。旧満州国時代に沈陽満鉄病院の日本人医者山下泰蔵が旧満州国中央博物館顧問を兼職していた。彼が1935年《満蒙》第十六年（巻）第十号において＜大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑＞という論文を発表して、文の中に契丹大字碑文の拓本の写真を二枚載せ、一枚は全部で、一枚は局部であったが皆、不鮮明である。この論文では碑に陰刻している文字は契丹文字で、慶陵哀冊と区別のある別の一種の契丹文字であると指摘していた。それ以後、世の中の人々は契丹大字の真相が初めて分かるようになった。

1939年の秋、瀋陽の骨董屋に重熙二十五年（実際は清寧二年、1056）に刻した契丹大字＜故太師銘石記＞が現れた。当時、建国大学の日本人教授稲葉君山がその年の九月二十七日の瀋陽《盛京時報》と長春の《大同報》において「墓誌の文字が女眞文字でなく、慶陵哀冊契丹文字と違いのある別の一種の契丹文字である」という談話を発表した。当時、学界には慶陵哀冊契丹字が契丹大字だと主張する者が多くて、稲葉君山氏も遂に＜故太師銘石記＞を契丹小字だと誤認した。

亡くなられた遼寧省博物館館長の李文信（字公符、1902-1982）先生が旧満州国《国立中央博物館論叢》1942年第3号において＜契丹小字“故太師銘石記”之研究＞を発表した。文の中に拓本の写真が三枚載せられ、一枚目は漢文志蓋、二枚目は契丹字志文、三枚

字でもない、それは不明の文字だ”と指摘した。李先生は論文のタイトルで稲葉君山説を受け継いでいて、＜故太師銘石記＞の文字を“契丹小字”と称していたけれども、論文の中では正確に慶陵哀冊のような種類の文字が“それは疑いなく契丹小字である”と指摘している。これは本当に慧眼独創だと言える。李先生は資料が不充分であったために＜故太師銘石記＞を贋作だと誤認したことがあるが（李先生はその後、何回も同じ分野の研究者にそれが間違いであったと認めた）女眞文字と比較することによって、正確に契丹大字の“年”という字を解読し、＜故太師銘石記＞の中で直接借用した漢字の“日”、“月”、“太后”等の意味を漢字の意味と同じだと考えていた。これが契丹大字の解読の事始めである。

1951年夏、遼寧省錦西縣西狐山から簫孝忠墓志が出土した。志蓋正面中央に漢字無しに蓮花が一輪、背面に漢字が十二行、志石に契丹大字が十八行刻されている。二種類の文字が対訳ではないが、ある内容、例えば、“紀年”、“官職”の二者が一致している。これは契丹大字の解読に便宜を提供した。

遼寧省博物館の亡くなられた研修員閻萬章先生は《考古学報》1957年第2期で＜錦西西狐山から出土した契丹文墓誌研究＞を発表した。この論では契丹大字簫孝忠墓誌の一部分の契丹大字について解読した。彼は漢文墓志と対照しながら、契丹大字中の葬式の日次“大安五年十二月廿五日”、また“重熙廿三馬年五月”、“木龍年”と年号の“統和”等を解読した。

海外では契丹大字を論述する学者は西田龍雄、長田夏樹教授などいるが系統的に契丹大字を解読した者は今までに豊田五郎氏しかいなかった。彼は1963年6月《東洋学報》第46巻第1号において、＜契丹隷字考＞を発表した。この論の契丹大字の“元年冬”、“猿年”、“鶏日”等についての解読は年月の経過により、その正しさが証明されている。

資料の欠乏と“文化大革命”等の原因で中国での契丹大字の研究は二十年間沈黙していたが、七十年代末に転機が訪れた。劉鳳翥《民族語文》1976年第4期において＜漢字に契丹大字𠂢の音が混入していることについて＞を発表した。この論は新しく出土した契丹大字の＜北大王墓誌＞を活かして、“𠂢”が漢字の“幼”或いは“幺”を参照して創製された契丹大字であり、その発音も漢字の“幼”と“幺”に近いと論じたと同時に契丹大字の“蛇”という字を解読したのである。が、年齢に相当する契丹大字を年号に解読したことはこの論の大きな間違いであった。

劉鳳翥は《民族語文》1982年第3期において、＜契丹大字中の紀年考釈＞を発表した。この論は、契丹大字中の年号“大康”、“正月”及び数字の“四”と“八”を解読した。

劉鳳翥と馬俊山とは《文物》1983年第9期において、＜契丹大字“北大王墓誌”考釈＞

を発表した。この論では契丹大字の“聖宗皇帝”、“銘曰”、“西南”、“天山之東北”等を解読した。また、明確に“契丹大字中には　音しない音節の外に発音字も存在する”と指摘し、契丹大字に発音的性格があることの、初めての論述であった。これは以後の契丹大字の解読に先導的意味を持っていた。この論はまた“契丹語が‘西南’を‘南西’とも言えるし、‘東北’を‘北東’とも言えると述べていた。この論には漢字と契丹大字の＜北大王墓誌＞の拓本写真と模写本が載せられていた。

遼寧省博物館文物工作隊は《文物》1980年第7期において、＜遼代延寧墓発掘簡報＞を発表して、文章中に契丹大字と漢字とが同一な石に刻された＜耶律延寧墓誌＞の拓本写真を載せた。劉鳳翥と于寶麟とは《文物》1984第5期において、＜“耶律延寧墓誌”の契丹大字釈讀挙例＞を発表した。この論では契丹大字の“小将軍”と“金吾大将軍”等を解読した。

1984年10月出版された《京都産業大学国際言語科学研究所所報》第6巻第1号に豊田五郎氏の＜契丹大字の日次について＞が発表された。文中契丹大字の“鶏”、“正月”、“蛇”、“火鼠”、“六”と年号の“大康”等の語詞を釈出した。

閻萬章先生は《民族語文》1988年第3期において＜契丹文“簫袍魯墓誌銘”考釈＞を発表した。文章は、正確に契丹大字中の単数字の“六”と“九”及び官職名の“守太子太傅”等を解読した。文中に契丹大字の簫袍魯墓誌の全文の模写本が載せられていた。閻萬章先生はまた《遼海文物学刊》1990年第1期において＜契丹大字墓誌紀年の考釈問題について＞を発表した。この論では契丹大字“六”と“九”の解読の成果を活かして劉鳳翥の間違いを指摘して、他の人と「契丹語が‘十干’を代行したものは一体、‘五行’か、それとも‘五色’であるか」を検討した。この論では‘十干’を表す五個契丹大字とその異体字を論じた。文中に載せられた“汙王之印”の契丹大字の紀年日付けも注意すべき重要な資料である。

金永田氏が1991年第4期において＜契丹大字“耶律習涅墓誌”考釈＞を発表した。この論では契丹大字の“道宗”、“天慶”、“西京”、“留守”、“并序”、“于越”等の語についての解読が正確である。文中に漢字と契丹大字耶律習涅墓誌の拓本写真と模写本が載せられていた。

劉鳳翥は新発表の契丹大字についての資料と国内外の最新研究成果及び国内外の学者の自分に対する批判により、自分の契丹大字解読中の間違いについても、反省し、間違いを修正した上で、大きく一歩前進させるために、＜若干契丹大字の解読及びその他＞という論文を完成し、1991年5月15日に日本の京都で行われた“中日連合初回契丹文字研究国際学術検討会”で、その論文を読み、好評を得たのである。その後、この論文は台北

1993年6月《漢学研究》第11巻第1期に登載された。論文では契丹大字“歳”を解読することから着手し、契丹大字の“三十”、“四十”、“六十”、“七十”など一系列の十位の数字を解明することができたのである。また契丹大字の単数字“七”を解読した。従って、契丹大字の十個の単数字は全部解読された。この論はまた年号の“乾統”を解読し、契丹大字の性格をも検討した。

香港中文大学中国語言文学部の亡くなられた教授阮廷焯博士も京都会議に参加した。彼が会議後、＜若干契丹大字の解読＞という論文を書き、それで1992年9月12日～17日に台北で行われた「第三十五回世界アルタイ学会」に参加したのである。その後、論文は、台北国学文文献館が出版した《第三十五回世界アルタイ学会会議記録》に所収された。論文では“夭年”、“嘉鹿山”と契丹大字の“撰”に発音を与えていて正しい。残念ながら先生は1993年8月24日に早世した。

豊田五郎先生も京都会議に参加した。会議後、彼が新発表の資料と最新研究成果により、改めて契丹大字についての研究を行う上で《契丹大字解読の手かがり》を書き上げ、それで1993年8月12日～24日に中国の赤峰市で行われていた“中国北方古代文化国際学術検討会”に参加したのである。その後、論文は蘇赫らが編集した《中国北方古代国際学術検討会論文集》（中国文史出版社1995年北京版）に所収されている。論文の契丹大字の“西平郡王”、“王家奴郎君”、“習尼里郎君”、“太師”、“太尉”“太保”、“使相”、“子”等についての解読は人々を頷かせている。それに一部の契丹大字に音をあたえている。

劉鳳翥は豊田五郎先生の研究成果の上で更に研究レベルを一段と高めた。彼が《民族語文》1996年第4期、即ち創刊100期の特別号において＜契丹大字若干官職名土地名之解読＞を発表して、女真字との比較対照を通し、契丹大字の“州”、更に契丹大字の“雲内州”、“静江軍”、“乾寧州”等の地名と“[illegible]離剌”等の人名及び“金紫崇禄大夫”、“衙内”等の官職名を解読した。また契丹大字の“曾祖父”、“祖父”、“父”、“夫人”、“太夫人”と“對”、“号”等を解読した。i類の母音語幹と調和して使われている全ての語尾を解読したのである。更に一部の契丹大字に音を与え、契丹大字が基本的に音節発音文字であると検討した。

九十年代に入ってから、数多くの契丹大字を解読する文章が発表され契丹大字の研究を、擬音と釈義とを結びながら研究する新しい段階に高めて来た。大部分の漢語借詞が解読されたので、今後の研究重点は契丹大字の契丹語の単語と文法及び付加構成要素を解読することである。今後の研究を展望して見ると、まず契丹語の親族語ー蒙古語・ダフル語の専門家に積極的に契丹大字の解読に参与していただくことである。次に契丹大字と女真

字との比較対照の研究に力を入れることである。契丹大字は女真字の源の一つであり、女真字は契丹大字の支流である。流れに従って源を探すのは契丹大字を解読するための有効な方法の一つだと、解読の実践で証明されたのである。第三に契丹大字と契丹小字との比較対照研究に力を入れ、特に契丹大字の発音研究においては契丹小字の研究成果を借りなければならない処が多いからである。第四に良い学風を養成し、真理を堅持すると同時に間違いを修正する勇気を持たなければならない。海内外の同じ分野の研究達は以上の四つの原則に従って、深く繊細な研究を重ね、あくまでやりぬいたならば、飛躍的な成果を上げることができるに違いない。私は海内外の研究者とこの目的を達成するために一緒に頑張ろうと願っている。

六十年間の契丹大字の研究成果を示すため、正しく解読したものと解明した契丹大字を類別に文末に添付して、ご参考に供します。

已經認識的契丹大字（括弧內為漢譯）

一　契丹大字中的數詞

一（一）　二（二）　三（三）　卅、丗（四）　五（五）　夲（六）　𠂇（七）　𠂤、𠂤、𠂤（八）　𡆥（九）　十（十）　廿、卄（二十）　𠀧（三十）　丕（四十）　𠂢（六十）　𠂉（七十）　𠂆（五十或八十）　𠂇（五十或八十）　玖（九十）　百（百）　万（萬）

二　契丹大字中的年號和廟號

𡆥𠂢丙（應曆）　六𠂢丙（保寧）　𠂤尤朱、𠂤纵（統和）　𠂤𠂢、𠂤𠂢、𠂤𠂢（重熙）　𠂤正来（清寧）　𠂤六（咸雍）　𡆥丙（大康）　𡆥乌涓、𡆥𠂢、𡆥𠂢涓（大安）　𡆥已眷（壽昌）　𠂤来攻几（乾統）　𠂤佼（天慶）　外彼皇帝（聖宗皇帝）　道彼皇帝（道宗皇帝）

三　契丹大字中的時令

𠂢（年）　月（月）　日（日）　玻（時）　夏（夏）　禾（秋）　冬（冬）　尤𠂢（元年）　𠂢月、𠂢月（正月）　五、丑、五（歲）　身𠂢（該年）

四　契丹大字中的干支和五行

𠂤（甲、乙、木）　𠂢（丙、丁、火）　𠂢（戊、己、土）　灭（庚、辛、金）　𠂢、壳（壬、癸、水）　𠂤（子、鼠）　𠂢（丑、牛）　𠂤（卯、兔）　𠂢（辰、龍）　𠂢、𠂢（巳、蛇）　𠂢、𠂢（午、馬）　𠂢（申、猴）　𠂤（酉、雞）

五　契丹大字中的地名

𠂢𠂢山（胡僧山）　其𠂤𠂢（乾寧州）　𠂢及牙𠂢伉、尤及牙𠂢伉（靜江軍）　𠂢𠂤𠂢（松山州）　𠂢𠂤（信州的）　𠂤伦𠂢𠂤（雲內州的）　𠂢云山（嘉鹿山）　𠂢由𠂢（歸化州）　𠂢𠂢（成州）　云山（烈山、裂山）　𠂢京（西京）

六　契丹大字中的官名

𠂢伦𠂢（衙內）　太𠂢（太師）　𠂢天、𠂢天、𠂢天（首長、長官）　𠂢𠂢（度使）　金𠂤太将𠂢（金吾大將軍）　𠂢𠂢（司徒）　𠂢闵屈𠂢太𠂢𠂢𠂢太𠂢（金紫崇祿大夫檢校太尉）　南西都𠂢（西南都監）　𠂢𠂢扑𠂢𠂢（節度副使）　𠂢𠂢（于越）　𠂢将（使相）　南𠂢𠂢工（南面詳穩）　𠂢𠂢𠂢夫𠂢（左都監）　伏𠂢太𠂢（檢校太保）　𠂢𠂢（宰相）　𠂢𠂢吾皮𠂢（左金吾詳穩）　闵𠂢（刺史）　𠂢太子太𠂢（守太子太傅）　𠂢司（觀察）　𠂢太扫（守太尉）　北𠂢（尚父）　𠂢𠂢（留守）

七　契丹大字中的姓名

𠂤玉方（耶律）　𠂢𠂢（虎烈）　𠂢𠂢𠂢（鄭家女）　𠂢𠂤（鄭哥）　何至（何乃）　𠂢工（萬辛）　𠂢𠂢伦（藥師奴）　𠂢𠂢（石婆）　𠂤𠂢（馬九）　𠂢𠂢（留女）　𠂢𠂢𠂢（三部奴）　𠂢𠂢（把八）　𠂢𠂢（陳六）　闵牙伦（慈家奴）　已之𠂢（闢离剌）　王牙伦（王家奴）　𠂢面之（習尼里）　何至牙伦（韓家奴）　可𠂢（拽剌）　𠂢𠂢（捺剌）

八　契丹大字中的封號

支及天太后、支攻殿太后（承天太后）　犀平伍王（西平郡王）　太王（大王）　犀王（鄭王）　犀水伍王（漆水郡王）　玉王（趙王）

九　契丹大家中的親屬稱謂

爷爷祘（曾祖父）　爷祘（祖父）　祘（父）　州（子）　攴伍、攴伍、攴受爻（夫人）　兄丟（郎君）　伀育（女兒）　太攴伍（太夫人）　及妥（娘子）

十　契丹大字中的其它一些語詞

沓（之、的）　昇（之、的）　寺（於、在）　并日芝(死、薨)　国（國）　买（大）　垂（天）　午（號、名、諱）　亮（印）　岂来（私第）　幺（矢）　𠂆（州）　南西(西南)　北東（東北）　盆州帛、盆扎、盆州面芝、盆州面工（封）　岳、坐寸扎（銘）　凹、佮、合（曰）　勻(墓)　冬面爻（嫁）　百氷之（墓）　穴芝（生）　坐荅芝（故）　耒州行凡荅习、耒州行凡荅扎（并序）　垂亚为夷（天朝萬順）

日本に収蔵されている
中国古代の官印三個についての注釈

呉　　振武

一、滎陽庶器



この印は、以前、日本の元大谷大学学長大谷瑩誠先生（１８７８～１９４８年）のコレクションであったが、現在は大谷大学禿 鼎 文庫に収蔵されていて、１９６４年日本の京都で出版された《中国古印図録》（神田喜一郎、野上俊静監修、竹田淳照編集、大谷大学発行）に収録記述されている。通し番号４６。

原印は、銅質でつまみがあり、印面は、縦２・１ｃｍ、横１・８ｃｍで、やや錆びている。原書に登載されている印面の写真を観察して、印文を次のように復原する事ができる。



年4期

（4）高明《中國古文字學通論》上編，146——180頁，文物出版社，1987。

契丹大字六十年之研究綜述

劉　鳳翥

契丹族建立遼朝之後，曾先後創製了兩種類型不同的契丹文字，即契丹大字和契丹小字，用以記錄契丹語。傳世的契丹文字也有兩種類型。一種以遼寧省錦西縣西孤山出土的韋孝忠墓誌爲代表，另一種以内蒙古巴林右旗索博日嘎蘇木瓦林花哈遼慶陵出土的帝、後哀册爲代表。前者爲契丹大字，後者爲契丹小字。這種界定，已得到海内外學界的認同。本文就是根據這種界定概述一下海内外廣大學者對契丹大字的研究情況，並展望一下此學科的研究前景。如有不妥之處，尚乞海内外博雅賜教。

傳世的契丹大字資料都是本世紀陸續出土和發現的。最初被發現的是刻於遼代咸雍八年(1072)的<大遼大橫帳蘭陵郡夫人建静安寺碑>。碑陽刻漢字，碑陰刻契丹大字。其漢字碑文著録於乾隆四十六年(1781)刻印的《欽定熱河志》，而契丹大字碑文則遲至1935年始被刊布。僞滿時期瀋陽滿鐵醫院的日本醫生山下泰藏兼任僞滿中央博物館的顧問。他在1935年刊印的《滿蒙》第十六年(卷)第十號上發表了<大遼大橫帳蘭陵郡夫人建静安寺碑>一文。文中刊布了契丹大字碑文的拓本照片兩張，一爲全部，一爲局部，均欠清晰。文中指出，碑陰的文字爲契丹文字，是與慶陵哀册有區别的另

一種契丹文字。世人始識契丹大字真面目。

1939年秋，瀋陽古董商店中出現了刻於重熙二十五年（實際是清寧二年，1056）的契丹大字<故太師銘石記>。當時建國大學的日本教授稻葉君山於當年九月二十七日的瀋陽《盛京時報》和長春的《大同報》上發表談話，指出墓誌上文字非女真字，而是與慶陵哀册契丹字有區別的另一種契丹文字。當時學界多有主張慶陵哀册契丹字爲契丹大字者，稻葉君山遂誤認爲<故太師銘石記>爲契丹小字。

已故遼寧省博物館館長李文信（字公符，1902—1982）先生在僞滿《國立中央博物館論叢》1942年第3號上發表了<契丹小字‘故太師銘石記’之研究>。文中刊布拓本照片三張，一爲漢文誌蓋，二爲契丹字誌文，三爲誌文局部。文中指出，<故太師銘石記>上的文字‘非契丹小字，非女真小字，乃一種世尚不明之文字。’李先生雖然在文章題目中因襲稻葉君山的説法，稱<故太師銘石記>上的文字爲“契丹小字”，但他在文章中則正確指出慶陵哀册類型的契丹文字“其爲契丹小字無疑。”這真可謂慧眼獨步。李先生雖因資料匱乏的局限而誤認爲<故太師銘石記>是贋品（李先生後來多次向同行承認這是一個失誤），但他通過與女真字的對比，正確釋出了契丹大字中的"年"字，並認爲<故太師銘石記>中直接借用的漢字"日"、"月"、"太后"等其義與漢字相等。這標誌着契丹大字解讀工作的開始。

1951年夏季，在遼寧省錦西縣的西孤山出土了蕭孝忠墓誌。誌蓋正面中央刻一朵蓮花而無漢字，背面刻漢字十二行。誌石刻契丹大字十八行。兩種文字雖不是互相對譯的，但有個別内容如紀年，職官等二者是一致的。這就爲解讀契丹大字提供了一些方便。

遼寧省博物館的已故研究員閻萬章先生在《考古學報》1957年第2期上發表了<錦西西孤山出土契丹文墓誌研究>。文中對契丹大字蕭孝忠墓誌中的部分契丹大字進行了解讀。他利用與漢文墓誌進行對比的方法釋出了契丹大字中的入葬日期“大安五年十二月廿五日”，還釋出了“重熙廿三馬年五月”，“木龍年”和年號“統和”等。

國外學者在文章中論述契丹大字者雖然有西田龍雄教授、長田夏樹教授等人，但進行系統解讀契丹大字者至今祇有豐田五郎先生一人而已。他於1963年6月在《東洋學報》第46卷第1號上發表了<契丹隸字考>。此文對契丹大字“元年冬”、“猴年”、“鷄日”的解讀都是經得住時間檢驗的。

由於資料匱乏和“文革”干擾等原因，中國對契丹大字的研究沉寂了二十多年，直至七十年代末始有轉機。劉鳳翥在《民族語文》1979年第4期上發表了<關於混入漢字中的契丹大字“ 𠂇 ”的讀音>。文中利用新出土的契丹大字<北大王墓誌>論定了“𠂇”原爲參照漢字“幼”或“幺”創製而

成的契丹大字，其讀音也近于漢字“幼”或“幺”。同時釋出了契丹大字中的“蛇”。把一些相當于歲數的契丹大字誤釋爲年號等是此文最大的失誤。

劉鳳翥又在《民族語文》1982年第3期上發表了<契丹大字中的紀年考釋>。文中考釋出契丹大字中的年號“大康”、“正月”以及個位數字“四”和“八”。

劉鳳翥與馬俊山在《文物》1983年第9期上發表了<契丹大字“北大王墓誌”考釋>。文中釋出了契丹大字“聖宗皇帝”、“銘曰”、“西南”、“天山之東北”等語詞。文中還明確指出：“契丹大字中除了不拼音的音節字之外，也存在拼音字。”首次指出契丹大字也有拼音性質。這對日後契丹大字的解讀有着指導意義。文中還指出：“契丹語中，‘西南’可能説成‘南西’；‘東北’説成‘北東’。”文中還刊布了漢字和契丹大字的<北大王墓誌>的拓本照片及摹本。

遼寧省博物館文物工作隊在《文物》1980年第7期上發表了<遼代耶律延寧墓發掘簡報>。文中發表了契丹大字和漢字共刻一石的<耶律延寧墓誌>的拓本照片。劉鳳翥和于寶麟在《文物》1984年第5期上發表了<“耶律延寧墓誌”的契丹大字釋讀舉例>。文中釋出了契丹大字“小將軍”、“金吾大將軍”等語詞。

1984年10月出版的《京都產業大學國際言語科學研究所所報》第6卷第1號上發表了豐田五郎的<關于契丹大字的日

期>。文中正確考釋出契丹大字中的“鷄”、“正月”、“蛇”、“火鼠”、“六”和年號“大康”等語詞。

閻萬章先生在《民族語文》1988年第3期上發表了<契丹文“蕭袍魯墓誌銘”考釋>。文中正確釋出了契丹大字中的個位數字“六”和“九”以及官名“守太子太傅”。同時刊布了契丹大字蕭袍魯墓誌的全文摹本。閻萬章先生還在《遼海文物學刊》1990年第1期上發表了<關於契丹大字墓　紀年的考釋問題>。文中利用對契丹大字“六”和“九”的解讀成果指出了劉鳳翥的一些失誤，並與他人討論了契丹語究竟是用五行還是五色來代替十幹的問題。文中考定了表示十幹的五個契丹大字及其異體字。文中公佈的“[illegible]王之印”的契丹大字紀年邊款也是值得注意的重要資料。

金永田在《考古》1991年第4期上發表了<契丹大字“耶律習涅墓誌”考釋>。文中對契丹大字“道宗”、“天慶”、“西京”、“留守”、“并序”、“于越”等語詞的考釋都是正確的。文中還刊布了漢字和契丹大字耶律習涅墓誌的拓本照片及摹本。

劉鳳翥根據新發表的契丹大字資料和國內外的最新研究成果及國內外學者對他的論難，對於他在考釋契丹大字方面出現的某些失誤進行了反思，在修正謬誤的基礎上又向前跨進了一大步，從而寫出了<若干契丹大字的解讀及其它>一文，並於1991年5月15日在日本京都“中日聯合首屆契丹文

宇研究國際學術討論會”上宣讀了此文，受到與會者的好評。後來此文發表於台北1993年6月出版的《漢學研究》第11卷第1期。文章從解讀契丹大字“歲”入手，從而考釋出契丹大字中的“三十”、“四十”、“六十”、“七十”等一系列十位數字。還釋出了契丹大字個位數字“七”，從而使契丹大字中的十個個位數字全部釋出。文中還釋出年號“乾統”，並討論了契丹大字的性質。

香港中文大學中國語言文學系的已故教授阮廷焯博士也參加了京都會議。他在會後寫出了<若干契丹大字的解讀>一文，用來參加於1992年9月12日至17日在台北舉行的第三十五屆世界阿爾泰學會會議。後來收入台北國學文獻館於1993年刊印的《第三十五屆世界阿爾泰學會會議記錄》。文中對“夭年”、“嘉鹿山”和對契丹大字“撰”的擬音都有一定道理。可惜阮先生已于1993年8月24日英年早逝。

豐田五郎先生也參加了京都會議。他在會後根據新發表的資料和最新研究成果，也重新對契丹大字進行了研究，在此基礎上寫出了《解讀契丹大字的綫索》，用來參加1993年8月12日至24日在中國赤峰市舉行的“中國北方古代文化國際學術討論會”。後來收入蘇赫等人主編的《中國北方古代文化國際學術討論會論文集》（中國文史出版社1995年北京版）中。文中對契丹大字“西平郡王”、“王家奴郎君”、“習尼裏郎君”、“太師”、“太尉”、“太保”、“使

相”、“子”等語詞的解讀都是令人首肯的。文中還給一些契丹大字擬了音。

劉鳳翥又在豐田五郎先生的基礎上使研究水平提高了一步。他在《民族語文》1996年第4期即該刊創刊100期專號上發表了<契丹大字中若干官名和地名之解讀>。文中通過與女真字對比，從而釋出了契丹大字中的“州”，進而釋出了契丹大字中的“雲內州”，“靜江軍”、“乾寧州”等地名和“闢離剌”等人名以及“金紫崇禄大夫”、“衙內”等官名。還釋出契丹大字中的“曾祖父”、“祖父”、“父”、“夫人”、“太夫人”和“封 ”、“號”等語詞，以及與i類元音的詞幹和諧使用的所有格詞尾。還給一些契丹大字擬了音，並進一步討論了契丹大字基本上爲音節拼音文字的性質。

九十年代以來，一系列解讀契丹大字文章的發表，把契丹大字的研究水平提高到擬音與釋義相結合的新階段。大部分漢語藉詞已被釋出，今後的研究重點爲解讀契丹大字中的契丹語固有的單詞及語法附加成份。展望今後的研究工作，首先需要精通契丹語親屬語言如蒙古語、達斡爾語方面的專家積極參與解讀契丹大字的工作。其次是需要加强契丹大字與女真字的對比研究。契丹大字是女真字的源頭之一，女真字是契丹大字的流。解讀實踐已經證明，順流溯源是解讀契丹大字的有效方法之一。第三是加强契丹大字與契丹小字的

對比研究，尤其是在契丹大字的擬音方面更要多借鑑契丹小字的研究成果。第四要培養良好的學風，不斷開展廣泛的學術討論和學術爭鳴。既要勇於堅持真理，又要勇於修正錯誤。海內外的同行們按着上述四項埋頭多做深入細緻的研究工作，持之以恒地堅持下去，積累到一定程度，必然會取得飛躍性的成果。我願與海內外同行爲達此目的而共勉。

爲了展示六十年來的契丹大字研究成果，特把我認爲解讀正確的已經釋讀出來的契丹大字分類列出附於文末，以資參考。

已經認識的契丹大字（括弧內為漢譯）

一　契丹大字中的數詞

一（一）　二（二）　三（三）　卅、丗（四）　五（五）　夂（六）　将（七）　犬、癶、癸（八）　受（九）　十（十）　廿、丗（二十）　厄（三十）　丞（四十）　於（六十）　冬（七十）　仐（五十或八十）　夲（五十或八十）　玖（九十）　百（百）　万（萬）

二　契丹大字中的年號和廟號

奚亢丙（應曆）　六亢丙（保寧）　奎九朱、奎紵（統和）　奎佩、奎汎、奎佩（重熙）　奎正来（清寧）　奎六（咸雍）　奚丙（大康）　奚乌涌、奚恬、奚乃涌（大安）　奚已眷（壽昌）　奎来伋几（乾統）　奎佼（天慶）　外伋皇帝（聖宗皇帝）　道伋皇帝（道宗皇帝）

三　契丹大字中的時令

来（年）　月（月）　日（日）　玟（時）　夏（夏）　禾（秋）　冬（冬）　光来（元年）　禹月、禹月（正月）　五、丑、丑（歲）　身来（該年）

四　契丹大字中的干支和五行

忝（甲、乙、木）　忒（丙、丁、火）　兵（戊、己、土）　灭（庚、辛、金）　市、壳（壬、癸、水）　樂（子、鼠）　旱（丑、牛）　乘（卯、兔）　安（辰、龍）　承、杲（巳、蛇）　马、丐（午、馬）　岸（申、猴）　芰（酉、雞）

五　契丹大字中的地名

亖史山（胡僧山） 其攵厶（乾寧州） 火及牙当伉、先及牙吉伉（静江軍） 户坐厶（松山州） 序夲（信州的）

攴伦允夲（雲内州的） 兄云山（嘉鹿山） 昇由厶（歸化州） 兄厶（成州） 云山（烈山、裂山） 盈京（西京）

六 契丹大字中的官名

兄伦允（衙内） 太景（太師） 火夭、先夭、先夭（首長、長官） 节景（度使） 金伋太将号（金吾大将軍）

芭禹（司徒） 亢闵屈丙太安犮虔太允（金紫崇禄大夫檢校太尉） 南西都犮（西南都監） 序咎扑安夷（節度副使） 左缶（于越） 景将（使相） 南分凡工（南面詳穩） 垗丗鬼夫坐（左都監） 伏庾太申（檢校太保）

弄犮（宰相） 并亢吾皮眷（左金吾詳穩） 闪景（刺史） 守太子太安（守太子太傅） 臭司（觀察） 守太扫（守太尉） 北安（尚父） 亢守（留守）

七 契丹大字中的姓名

攸玉方（耶律） 威艽（虎烈） 麦牙冇（鄭家女） 麦欠（鄭哥） 何至（何乃） 万工（萬辛） 吞景伦（藥師奴） 夭珡（石婆） 允本（馬九） 亢冇（留女） 岑另夆（三部奴） 伐尿（把八） 丁亢（陳六） 闵牙伦（慈家奴） 已乏牛（闢离剌） 王牙伦（王家奴） 序面之（習尼里） 何至牙伦（韓家奴） 可云（拽剌） 苛帛（捺剖）

八 契丹大字中的封號

支及天太后、支攵殿太后（承天太后） 犀平伍王（西平郡王） 太王（大王） 犀王（鄭王） 犀水伍王（漆水郡王） 巫王（趙王）

九 契丹大家中的親屬稱謂

夆夆米（曾祖父） 夆米（祖父） 米（父） 爪（子） 安伤、安仞、安受爻（夫人） 兄丟（郎君） 伦冇（女兒） 太安伤（太夫人） 攵妥（娘子）

十 契丹大字中的其它一些語詞

沓（之、的） 昇（之、的） 寺（於、在） 并日之(死、薨） 国（國） 买（大） 垂（天） 午（號、名、諱) 亮（卯） 芭来（私第） 幺（夭） 厶（州） 南西(西南） 北東（東北） 笳州帀、笳扎、笳州面之、笳州面工（封） 垗、坐寸扎（銘） 四、佮、合（曰） 勻(墓） 冬面爻（嫁） 月冰之（墓） 穴之（生） 坐荅之（故） 未州仃凡荅习、未州行凡荅扎（并序） 垂亚万夷（天朝萬順）

日中国交正常化２５周年記念事業

日中合同文字文化研討会発表論文集

発行日　１９９８年7月1日

編　集　日中合同文字文化研討会編集委員会

発行所　文　字　文　化　研　究　所

所　長　白川　静

日本・京都市中京区三条通烏丸東入梅忠町24-1

TEL 075-252-6424／FAX 075-252-4180